



無形文化財
岩手県の「鹿踊り」

11月22.23の両日水戸市復興祭の一駒として行われた広告祭には、車馬数百台、数千人が繰り出して水戸市内を練り歩き、クリスマス・セール、歳末セールへの前哨戦を花やかに展開した。

大
名
行
列





ふたたび「統計」のために

田 中 文 司

新装なつた県庁の屋上から朝の下界を眺めてみる。汽車、電車、バスなどあらゆる交通機関から市街に吐き出されるおびただしい人の渦、その渦が流れとなつて次第に細くなり、やがて各自の職場や学校に吸いこまれて行く。雨の日、まつ黒な洋傘の花が人道を埋め、その中に点々と赤い傘が交じつて風情を添える。

〃 9千万四ツの島に狭くいる〃 まつたく日本の人口はふえたものだ。昭和の初期の国定読本には、『大日本、大日本、神のみすえの天皇陛下、われら国民7千万を』と教えられたものである。昭和30年国勢調査の人口は89百万人、約9千万人であるから、太平洋戦争を経て30年の間に約2千万人ふえていることになる。2千万人といえば、フィリピン19百万人、エジプト19百万人、トルコ21百万人であるから、その増加ぶりがわかる。

本県の場合も同様に、昭和30年国調の人口が206万人大戦突入前昭和15年国調の人口162万人で44万の増、人口密度は1方軒当り昭和15年260人、それが昭和30年には340人だから、僅か1方軒の土地に74人がふえていることになる。

これらの膨脹した人口が、狭くなつた限られた国土に耕地に、職場に生存しているのであり、その狭き門を求めて、年々学窓を巣立つ若者達が希望に満ち溢れて羽ばたくのだが、ナベ底景気などの反映もあつて、就職も思うように行かず、その何割かが夢を打ちしだかれ、浪人したり、農家に依存する潜在失業者(二三男)となつて仕方なく農業に従事しているという状態になるのである。これは昭和30年度の県民所得による労働生産性において、第一次産業(農林水産業)の所得が、他の二次、三次の産業にくらべて、その就業人口による所得割合が意外に低いことでも判る。すなわち第一次産業の就業人口が63.2%で、これに対する所得は僅かに39.3%に過ぎず、さらにその大部分を占める農業の就業人口は62.1%で、それから生ずる所得は35.5%と驚くほど低い。これは農家の経営が近代化されつつあるとはいへ、その大部分は未だ旧態依然とした過重労働によつていることにあるが、二三男対策もまた大きな問題であろう。

街は、はなやかに盛装され、ビルが建ち、きらびやかな商店のウィンドウ、高級車のラッシュ、一見近代的な文化国家らしく見えるけれども、デフレの波に押し流される企業に対する不安や、経済的、社会的ないろいろやこしい問題、はては汚職や、グレン際の横行、性道德の頹廢、ロカビリの叫喚、育ち行く日本の足がきを見るような数々の政治的な問題が前途に横たわつている。

私達が目指している健康で明るい文化的な生活は、国

や県などで行ういろいろの政策が合理化されて、円満に遂行されてこそ、始めて得られるものであり、ここに各種の行政上の施策の計画、立案の土台としての統計の必要性が生れてくるわけである。過去の統計は「統計の為の統計」であれば良かったが、近代化された現今の社会においては、「使われる為の統計」使う為の統計が要求され、その数字が、何んの為、どのように使われるか、という使用上の目的によつて、綿密に科学的に企画設計され、実査、審査、集計、公表などの過程を経て一つの統計が生み出される。

統計の重要性ということは、誰しも一応は、口にすることであるが、いざこれを予算化することになると、どうしても不急の仕事に見られ勝ちで、直接一般の人々に影響のある事業が優先される。これにはいろいろ社会的な「大衆に対する人気？」問題などもあつて止むを得ない事でもあるが、しかしそれ等の事業が円満に遂行される為には信用のある土台となる基礎資料による、正しく計画立案された無駄のない施策が必要であると思う。

一つの統計が作り出される為には、その裏に大勢の統計人の努力がかくされていることを忘れることは出来ない。統計思想の低い一般の人々に対し調査の趣旨の普及に努めながら、正しい申告を得る事は容易なことではない。統計の生命の一つである限られた期日までに、正確な調査票を迅速に取まとめることは一通りの苦勞ではない。如何に立派な計画でも、被調査者の理解と協力がなくては、正しい統計は望まれない。最近では統計協力学校などにより、子供達に対する統計教育が普及し、一般の人々にも理解の度を深めつつあるとはいへ、税金などに結びつけて正しい申告を得ることは仲々むづかしいことであり、今後統計の趣旨の普及という点がやはり統計を前進させていく為の一つの課題となろう。

統計は、その種類により、その時の社会状況によつてある程度その持つ内容に喰い違を生ずる場合があると思われから、これらの利用については、生の数字をそのまま使用する場合でも、その時の社会状況を客観的に判断して誤りのないように注意しなければならないと考えられる。

統計は一見地味な『縁の下の力持ち』といわれているが日進月歩する社会活動、経済、行政活動の為に手をうつ為の道具として、その持つ意義と使命は今後ますます大きいと思う、私達はこの職責に誇りと自覚を新にして努力して行きたいと考えている次第である。

(統計課統計主事)